

外国につながる 子どもの教育



若林 秀樹

▼3▲

アルファベットの言語圏から来た子どもも多くは、日本語の文字習得に苦労します。日本語はまるで模様に見えるそうです。ひらがなの「む」は虫みたい、といった具合です。模様ですから、放っておくと筆順なんてでたらめです。ひらがなの「ぬ」「や」「ゆ」をすらすら逆順に書くのを見ると、その器用さに思わず笑ってしまいます。

筆順・履物のそろえ方

ほとんどの子どもは文字の縦書きが初めてなので、私はよく筆ペンを使って指導しました。昔は筆で書いていたことを伝え、「ありがとう」の文字を横書きと縦書きで書かせます。すると、縦書きの方が書きやすいことを体で感じ取り、日本語への理解が一気に深まりました。日本語教室で筆ペンが

「当たり前」の文化伝える

はやってしまい、筆ペン禁止令を出したこともありました。

書く時の姿勢や紙の向きも指導します。それまで横書きしか経験のない子どもはいつの間にか紙が斜めになり、文字も次第に横を向いてしまいます。そんな時は、セロハンテープで紙を机に固定してしまいます。すると今度は紙ではなく子どもの体が曲がっていくので、席の後ろに回って椅子を押さえるという具合です。また、筆順を間違えた時は、もう一度書かせる指導も徹底しました。

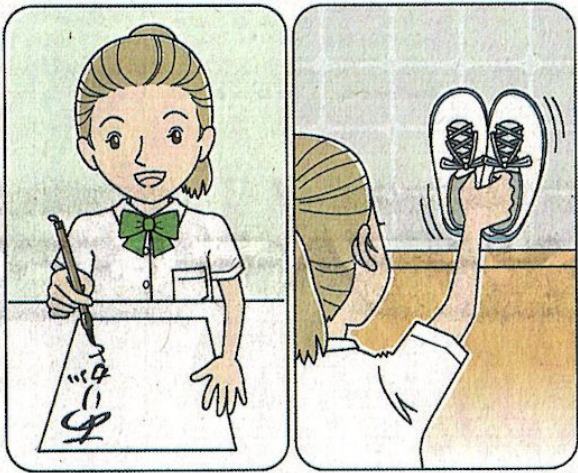
「外国人なんだから、筆順なんて違っていいのでは」という学級担任もいましたが、私はその考えに反対です。筆順は、文字が美しく書けるように考えられています。ですから、筆順なんてどうでもいいと言ってしまったら、その子どもはバランスの崩れた文字をずっと書き続けることになりま

す。文字を書くたびに、「外国人だから仕方がない」と思われてしまつのは不幸なことです。

履物をそろえる大切さも伝えました。日本人なら、普段は無造作に脱ぎ捨てていても「履物をちやんとしよう」と言われればどうすれば良いかわかります。しかし、外国につながる子どもはそうはいきません。日本人なら誰でも知っている「当たり前」の文化を一つ一つ伝えなければならぬのです。「外国人だから仕方がない」。無意識とも言えるこの感覚を消していくことがこれからの日本社会に求められています。

(宇都宮大客員准教授)

北日本新聞 (富山) 2019.7.22 (日)



画・原澤美紀